おらほの最上川学 五百川峡谷編

今回は、最上川舟運の代表的な積荷だった青苧について、以前に大谷の和田新五郎さんより教えていただきまとめた報告書がありましたのでご紹介いたします。

朝日町宝ノート　No.0701　「和田新五郎さんの青苧（あおそ）」

大谷浦小路の和田新五郎さんは、現在も「青苧」を栽培し、糸をとっています。！

古来からの衣料原料だった青苧の栽培は、江戸時代から明治時代にかけての朝日町の代表的な産業でした。名声を博した奈良晒、越後縮、近江蚊帳の原料は、おもに山形県や福島県で栽培されていた青苧であり、その半数は朝日町の「五百川苧」や大江町の「七軒苧」だったそうです。京都の北野天満宮には、宝暦 6 年(1756)に、当時巨額な取り引きをしていた大庄屋鈴木清助氏（大谷峯壇）が商仲間と奉納した立派な石灯籠が現存しています。！

和田さんの栽培している青苧は、昭和 10 年、15 才の時に祖父の元治さんと植えたものを残しておいたものだそうです。糸をとる「青苧はぎ」の仕事は、母のふみえさんの仕事で、収穫したものは馬具用の縄をなったりするのに使っていたそうです。！

8 月、刈り取りや青苧はぎを見せていただきました。和田さんは背丈程も伸びた枝を一本一本刈り取ると、手のひらで茎をぎゅっと掴み、手前に引き、葉っぱをみごとに扱き落としました。私も真似をしてみましたが、柔らかな手のひらではとても痛くてできませんでした。また、糸をとるために、一晩水に浸けた茎に鉄製のへらを押しあてて引っ張り、青い表皮をはぎとる作業は、弱くすると取れず、強すぎると糸が切れそうになったりしました。大変でしたが楽しく体験させていただきました。!

手のひらに付いた茶色い染みは 4、5 日消えませんでしたが、昔の青苧職人と同じと思うとうれしくなりました。！

〔栽培から糸とりまでの作業〕

1　霜の季節が過ぎた頃、まばらに伸びた新芽を背丈が揃うようにいったん全て刈る。
2　お盆頃に、根元から刈りとり、葉を取り除く。
3　束にして、水に一晩浸けておく。
4　茎を折り木質の芯を取り除き、皮だけを剥ぎ取る。
5　専用の板に載せ、鉄製のへらを使って緑色の表皮を取り除き、糸を取り出す。
6　一束ずつ天日に軽く干す。

〔青 苧　あおそ〕
イラクサ科の多年草。別名 カラムシ。本州以南の山野に自生。高さ約 1.5m。

参考文献『朝日町の歴史』（朝日町教育委員会発行）

報告　宮森友香
（平成 16 年 8 月取材）

和田　新五郎（わだ しんごろう）氏

大正 11 年生まれ。大谷浦小路在住。長年農業の傍ら林業に従事。エコミュージアムシンポジウム「お江戸ではござらぬ、大谷でござる。」では、『大谷往来』節を披露。また、ご協力いただき、青苧作業を収録したエコミュージアムビデオ『和田新五郎さんの青苧』（朝日町エコミュージアム協会制作）が平成 19 年 3 月に完成。